

第 38 回学会大会

基 調 講 演

シンポジウム

ワークショップ

基調講演：地域興しとレクリエーション

森川貞夫（日本体育大学）

「地域興し」＝「地域づくり」とレクリエーション・スポーツとの関わりはこれまでも多くが論じられてきたが、一方では平成の大合併以後、地域のさまざまな変貌、とりわけ「限界地域」とよばれる過疎化が進む地域にとっては遊びやレクリエーション・スポーツどころではないという悲鳴に近い声も聞こえてくる。

かつての地域共同体が崩壊し住民の共同体意識が希薄化してきたという声もまた危険信号のように語られてきた。だからこそというべきであろうが、お祭りにしろ御輿や地域運動会のような町や村、地域を挙げて住民が大事にしてきた地域行事の再評価と再生、活性化が求められているのも事実であろう。

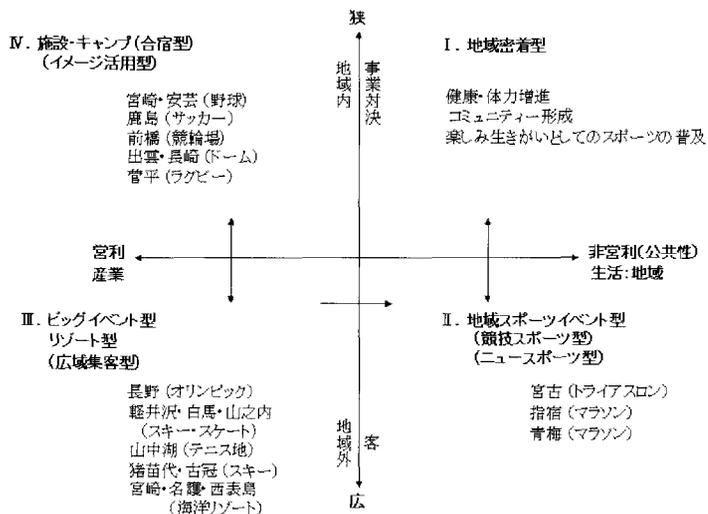
あらためてこれまで地域行事として存在した娯楽や運動等の諸活動のもっていた機能と役割を地域形成の視点からとらえ直すと共に今日の地域の状況に照らし合わせつつレクリエーション・スポーツ活動の可能性と期待を探りたい。

しかし、これまでの取り組みの事例が示すように「地域興し」や「地域づくり」の問題はそこに生きて生活している住民の主体形成の問題と共に語られなければ実効性も希望も存在し得ない。その場合にレクリエーション・スポーツの機能・役割は現実の地域の実態に対して直接的なものというよりはむしろ副次的なものであり間接的もしくは結果として生じるものにとらえておく方が無難であろう。というのはレクリエーションあるいはスポーツそれ自体は本来自己目的的な活動であり手段的に取り扱われることを嫌うものであるであろうというのが私の立場である。

とは言うものの現実的には行政レベルであれ地域レベルであれ「スポーツによる地域振興」が期待され取り組まれてきたのも事実である。それらを分析するために類型化したのが図・1である。

したがって問題はそれぞれの地域の実態に合わせて「地域主体形成」との関わりで地域興しの手法としてのレクリエーション・スポーツ活動の求められる「主体者像」すなわち地域における「スポーツの主人公」のイメージをふくらました。

図 スポーツによる地域振興の類型化



注) 自治大臣官房地域政策課(1986)、山口(1996)を参考に新たに作成した

シンポジウム：「地域興しの手法としてのレクリエーション」再検討

— 新潟市における諸事例からの提案 —

提案趣旨など

コーディネーター：小田切毅一氏（新潟医療福祉大学）

地域興しにレクリエーションが有効であり、また不可欠であると考えられる場合の、このレクリエーションとは何か。言うまでもなくこの言葉は、単なる楽しみの活動だとか余暇を消費する行動として理解されるものではない。地域を活性化させるより善い生き方に向けて、地域を拠点にした人的交流の広がりを実現する「創りかえ」（re+creation）の行動、とでも言うべきであろう。商業的収益とか経済的効率といった実利性が最優先されるのではなく、仲間とともに喜び連携し協力するコミュニケーション・ワークが目指されるという意味で、満足感や幸福感に通じる創造的生きがい行動と考えられる。

すでに枚挙の暇もないほどに、新潟市や県下近隣地区には、数多くの地域興しの実例がある。まず「食」にかかわる実例としては、その土地の特産品の宣伝とも一体となったイベントが、果物や鮮魚や米づくりや酒づくりなどに及んで多様に展開されている。また「景観保全」にかかわっては、「はせぎ」や「棚田」や「潟」や「花づくり」などに関連する実践も多様にみられる。あるいは、「雁木」のある町並みでの音楽会のような、イベント開催などもこの例外ではない。そして地域のシンボルの存在となる風物や文化的遺産に着目する地域興しも多い。たとえば「凧揚げ」「牛の角突き」「ひな人形」「踊り」「花火」... など。さらに豪雪地帯特有の種々の「雪祭り」のような機会も人的交流に欠かせない。これら諸事例の中には、地域興しの手法としての上述のレクリエーションの意味合いが、生かされている事例が多いのである。

では本シンポジウムで対象とする新潟市とその周辺地区（近郊）は、ニーズに対応するいかなる地域興しのビジョンを持ち得るのだろうか。永年生活が営まれてきた地域特有の、自然的、文化的、政治・社会的な問題状況や時代的制約などに着目する必要がある。たとえば新潟市を特徴づける「田園型政令都市」といった性格づけは、広大な農園地域に近接して、旧新潟市の比較的人口低密度の都心部やいくつかの周辺市街地が点在する、昨今の合併を伴う行政区画への状況把握とも結びつく。都市部の拡大に伴う中心部の空洞化傾向なども見落とすことは出来ないが、ともあれ従来からの政令指定都市とも異なる実情に着目した性格づけである。こうした性格づけは必然的に、食糧自給率が高い新潟市の姿をクローズアップさせる。そして周辺豪雪地帯との円滑な人的交流の確保の問題や、さらには自然の宝庫を現存させ続ける一方で、同時に永年にわたって人口流出を継続させてきた事情なども、多面的・総括的に包含する。

新潟市は、こうした意味では確かに、いわゆる「住んでみたい都市」に関する一般的イメージ、すなわち便利で快適で過密な消費型都市のイメージとも、一線を画しているように感じられる。それ故にレクリエーション振興という視野に立つ場合、新潟市とその周辺地区（近郊）における地域興しには、レクリエーションの新たな社会運動的な展開が期待できるようなも思われるのである。こうした問題の発展の可能性に関しては、以下に続く四つの話題提供と、それらを踏まえた議論の成果を待つことにしたい。

第一話題

アルビレックス新潟における地域興しの実践から

田村 貢（アルビレックス新潟）

レクリエーションという観点からみるとサッカーは、自らが参加してプレーして楽しむだけでなく、家族や仲間とともに最員のチームや選手を大合唱で応援する「観るスポーツ」ともなる。ホームスタジアム東北電力ビッグスワンを埋め尽くす大観衆。「おらがチーム新潟」を応援する大声援。日本海に面した雪深い街、日頃は穏やかで感情を表に出すことをしない新潟の人たちが、オレンジ色のユニフォームを纏い、「アイシテル ニイガタ！」と熱狂する。こうした熱気は、雪国の街というイメージにはこれまで無かったものであり、新しい新潟の地域興しを象徴・先導するような「異空間」を創り出している。

以下は、アルビレックス新潟がJ1に昇格した頃に発刊された書籍『ニイガタ現象』に、ひとりのサポーターが寄稿した文章である。「今朝も早くからサッカーを観に行くため、準備している娘。新聞、テレビ等滅多に報道されることのないJ2サッカー。帰宅するや試合内容を嬉々と話す。物事を何時も冷めた目で眺める娘を何故そこまで駆り立て、燃え上がらせるのか不思議でならなかった。牛に引かれて善光寺参り、ではないが、一度はサッカーを観てと言われ仕方なく一回だけは観に行く約束をした。それまでスポーツ観戦と言えば野球、息子を連れて東京ドームへ何回も通った。晩酌をしながら野球のナイター観戦が毎日の楽しみで、妻や娘の不興を買っていた。妻とともに新潟スタジアムに足を運んだ。何かが違う、この雰囲気、この熱気。選手の名前、試合のルールも知らないのに、腹の底から湧き上がる不思議な気持ち。試合後、妻の目を見るところですらと涙が浮かんでいる。かく言う自分も目頭が熱くなっていた。何が琴線に触れたのか。それを確かめるため、家族の驚きを尻目に観戦に通いだした。何時も笑顔でファンに接する GK 野澤、ひたむきにボールを追いかける MF 寺川、仁王の如く敵に立ち塞がる FW 船越等々、観戦を重ねる程にサッカーの奥深さ、楽しさを覚えた。J1 昇格がかかった長居スタジアムでの一戦、期待が大きかっただけに気持の落ち込みも激しかった。アルビレックスを応援するようになり、何が何でも J1 昇格を果たし、日本一のチームに成長を願う自分を時として可笑しく思う。観戦を通じ多くの人と知り合い、話した。アルビレックスは俺たちのチーム、俺たちが育てる、そんな気持ちで皆が応援しているのだと思う。2003年サポーターの願いJ1昇格、大きな木、果実を得ることが出来た。この木に光を当て、肥料を与え大きな木に育てるため、2004年力の限り、声の限り、精一杯応援するぞ。」

多くの観戦者は、ただ単にサッカーを観戦するだけではない。共通の想いを持つことで、家族との絆が深まり、新しい仲間と出会う。こうした、小さなコミュニティがスタジアム全体を埋め尽くし、連帯感や一体感が生まれ、上述した「異空間」を演出するのである。私どもの仕事は、多くの地域の人々の手による地域のアイデンティティをつくり育てていくこと、まさに地域興しに向けてコーディネートしていくことだと自負している。Jリーグ百年構想を実現させる経営努力は、だから必然的に新潟に豊かなスポーツ文化を育み、環境整備の取組などへと運動を具体化させる。このことを、大勢のサポーターの方々と確信しつつ進みたいと考えている。

第二話題

生涯スポーツの拠点、総合型地域スポーツクラブにおける新潟的地域興しを問う 西原康行（新潟医療福祉大学）

2000年に制定された文部科学省のスポーツ振興基本計画は、全国の各市町村に最低一つの総合型地域スポーツクラブ（以下、総合型クラブ）を設立することを目標として掲げた。新潟県では、2008年9月現在、30の総合型クラブが設立されている。そのうち新潟市においては、中核的な都市部から20km以上離れた田園の広がる豊栄地域に「ハピスカとよさか」という総合型クラブがあるだけである。スポーツ振興基本計画の各市町村に最低一つという到達目標は達成しているが、都市部の生活者がこの「ハピスカとよさか」に足を運ぶことはない。こうした現状にたつて、全国に普及しつつある総合型クラブをめぐって、本シンポジウムでは二つの問いを立てたい。

一つ目は、そもそも新潟的な総合型クラブという新潟ならではのオリジナルなクラブは存在するのかという問いである。全国に現在約2,400ある総合型クラブの中において、新潟の30のクラブにはこんな特色があるということがいえるのであろうか。農村部、都市部、新興住宅地、過疎地、高齢化が進んでいる地域といった地域カテゴリーで違いを見出すことは可能かもしれない。例えば、高齢者が多い地域では、高齢者向けの事業（レクリエーション、以下レク）を多く取り入れた総合型クラブがあり、新興住宅地で若年層が多い地域は、子供や若者向けの事業（レク）を多く取り入れたクラブがあるといった特色である。そうであれば、新潟市は田園政令指定都市を宣言しており、コシヒカリを生産している農家が多いのだから農村に分類されるのであろうか。それとも政令指定都市なのだから都市に分類されるのであろうか。また、例えば古くから新潟に伝わる伝統芸能、近代から現代にかけて政策的に地域に普及させたレクやスポーツ、あるいはメッカ作りで新潟的レクや新潟的クラブを語ることは可能なのか。

二つ目の問いは、どうすれば地域がレクやスポーツによって興隆するのかという問いである。これまで地域振興のために政策的にレジャー・レクやスポーツを普及してきた地域がいくつかある。その在りようは様々で、レジャー環境の開発、メガスポーツイベントの招致、メッカ作り、地域オリジナルなレクやスポーツの開発と地域住民への啓蒙などである。しかしながら、例えばメガスポーツイベントの招致として長野オリンピックを取り上げた場合、開催後に長野市がどのように興隆したであろうか。選手村はマンションとして再利用されているが入居率は低く、各競技会場も利用される頻度は少ない。レジャー環境の開発では、かつて隆盛した新潟県の湯沢町が現在は閑散としたマンション群だけを残している。これらの例は、いずれもむしろ否定的な遺産に思える。

結論的に、総合型クラブの新潟的地域興しを考える場合、むしろ日本海側の荒波の中で農業を主体として生活してきた内に秘めた耐え忍ぶ力と、古くは北前船が行き交い、他を受け入れる開放性を兼ね備えた新潟人の身体性にその可能性を見出したい。意図的、政策的ではない、自由な地域の中から自然に発生してくる力に委ねることや、地域の中から出てくる旗振り役の活動家の土着のエネルギーにその可能性を見出したい。

第三話題

ハンディキャップ・レク、障害者主体の文化による地域興しの試み

池 良弘（日本福祉医療専門学校）

「誰もが住める町」で福祉レクを活用し、障がいがあっても高齢であっても、誰もが住みやすい町づくりを目指したい。「誰もが住める町」とはハード面に視点が置かれがちであるが、実はソフト面の整備と主体者（障がい者・高齢者）の心の置き所で決まる。その実現を可能にするのがレクリエーションだと考えている。

私は学生時代、上京し車いすを利用する方々と活動を共にしてきた。いわゆる生活圏拡大運動を実践したり、また障がい者バスケットなどを用いた「くるまいすの介助法」（朝日厚生文化事業団）などを確立した。

帰郷してから国際障害者年に日本で始めて、障がいを持つ者と持たない者が共に楽しめるハンディキャップ・レク（現在の福祉レクの礎）を提唱し、障がい者の中からレク指導者を発掘することを目指しつつ、彼らが活躍できるような「場づくり」をしてきた。脳性まひの方がウオーケラリーの指導をしたり、全盲の青年がダンスや卓球を指導したり、聴覚障がい者の方々が「万代太鼓」で海外公演をしたり、障がいがあってもそれを意識せずに工夫することで、どんなことでもできる姿を示したことによって、マスコミにも取り上げられるようになった。

そんな文化的環境の反映だろうか。新潟で生まれたお笑い集団「なまら」に、脳性まひブラザーズの障害をもつ方々が、障がい者集団「こわれもの祭典」として、逆に障がいを利用するように、自身の存在をアピールするような事態も生じている。地域（町）興しの場としての演芸場が新潟市古町に開設されたが、私はこのような彼らの出演の経緯を注目して見守っている。

また私の本務校では、授業で学んだレク技術を地域の高齢者に要介護予防の一旦として、活用できるよう課外実習という制度を取り入れ、要介護予防の活躍を展開している。そして介護実習とあわせ、福祉レク実習を介護実習の段階に応じて展開している。資格導入から日本でも中心的役割を果たし、高齢者施設では個別レク援助を提供しているが、何よりも利用者の行動変容を引き出し、何も話もできない利用者が学生と話し、歌を歌うといった光景を実現することが目指される。個別レク援助の実習に関しては学生の指導はもちろんのこと、施設職員の理解がなくては実施できない。導入当初は介護教員と施設の理解を得るための苦労も大きかった。教員がレクの重要性を解き明かし、自主的に施設を巡回しながら福祉レクの説明に回った。さらに、福祉レクのリカレント教育として実施していた公開講座を県下の施設職員を対象に提供した。現在では介護技術とレク援助のできる学校として、学生の活躍も含め、地元新聞などにも紹介され、知られるようになっていく。

障がいがあってもなくても、高齢であってもなくても、レクを使って障がい者や高齢者にとって住みやすい、心安らぐ地域（町）作りの試みがなされていることは疑いもない事実である。障がい者や高齢者こそが、“受け手”ではなく、これからの地域社会の“担い手”になる。レクが心のよりどころともなり、地域興しの“主体者”としての役割を果たせるのだと確信している。

第四話題

市民ボランティアがつくりだす新潟のあたらしい都市づくり

上山 寛（建築家 上山寛アトリエ）

レクリエーション活動の新潟における新たな可能性という視点から、まザワールドカップ新潟大会の事例をもとに検証してみたい。

2002年に日韓共同開催でワールドカップが開かれ、新潟が最初の試合会場に選ばれたことはいまだに記憶に新しい。この世界的な大会を成功させようとさまざまな準備が行われてきた。大会時に新潟に世界からやって来るサポーターを暖かくもてなし、新潟の楽しい思いを持ち帰ってもらおうと、新潟市を中心に市民団体「ウェルカムにいがた 2002」が2000年に結成され新潟市の支援を受けながら様々な活動を行ってきた。筆者はこのなかで事務局長としてほぼ全体の活動に関わることが出来た。大会時に新潟駅前を埋め尽くした外国人サポーターの姿や中心部各所で繰り広げられた外国人サポーターによるパフォーマンスはワールドカップでなければ目にする事の出来ないハレの場であり忘れられない光景である。この活動には外国語が出来る、出来ないに関わらず多くの市民が参加し、外国人の案内活動等に活躍していただいた。2002年度末の解散記念シンポジウム・懇親会では、参加された多くの方々から「こんな充実した時間は無かった。またぜひ参加したい。」と言う要望をいただいた。彼ら彼女らが再び充実した時間を持てる時が、その後やって来たかどうかは定かではない。

私は日常的に建築設計を仕事としている。その延長線上で都市のありようやまちづくり活動等に関わる機会をこれまで多く持ってきた。そのなかでの活動は自ら住む地域を良くしようと確信的な人々による、やや自己犠牲的精神を含んだ部分が無いとは言えないと感じていた。ところがどうだろう。ワールドカップ時の「ウェルカムにいがた 2002」での活動を振り返ってみると、ここに参加した多くの人々は自己の感性と身体を駆使して外国人との交流を楽しみ自然体で創造活動を行っていたのである。これが「こんな充実した時間は無かった。もう一度体験したい。」につながり、結果としてより良い人間関係形成と都市の活性化につながっているのではないだろうか。これまではレクリエーション活動が個人の内面的な充実に視点が置かれてきか、その枠を超えて地域や都市の活性化にも大きくつながっていることを示している。レクリエーション的視点からの活動が個人個人の創造性開発と共に地域や都市の可能性を引き出す原動力と成りうるのである。レクリエーションの持つ新たな可能性の展開である。もっともこれには都市における文化的・社会的活動を長期的に誘発していく戦略的取組みが欠かせない。

新潟市に於けるスポーツ大会を例にとると国際的には約20年前のアジア卓球大会、そして2002年のワールドカップ大会が開催されているが、長期的戦略的な視点から取組んだ結果からこれらが実施されてきたわけではなく結果論である。おりしも新潟の抱える課題として、将来の北陸新幹線開通に伴い都市の衰退が始まると言われる2014年問題への取組みが急務である。新潟の対岸にはアジア大陸が広がり、ロシア、中国、韓国が隣接している。これら近隣諸国との文化的交流活動を戦略的な視点から積極的に推進し、そのなかでレクリエーション運動により自然体市民活動を誘発し、より魅力的な新潟を形成していくことが求められている。今、レクリエーション活動の新たな展開によって新しい新潟が誕生しようとしている。関係者の奮起を期待したい。

情報発信 ワークショップ：新潟

このワークショップでは、新潟ならではのレクリエーションによる地域興しの事例を、中越地震の災害との関係や、地域に開かれた大学を実現させるミュージカル出前などに触れながら、ご案内します。

進行・世話人：坂内寿子（新潟中央短期大学）

~~~~~

## ワークショップ①

テーマ 「中越地震災害復旧のレクリエーション支援体制づくり」

鈴木 允（新潟県レク協会理事

レク・コーディネーター）

### 1. はじめに

- ・ 当時の様子
- ・ 支援事業の大枠
- ・ 日レク協会・県レク協会との協議など

### 2. コーディネーターとしての活動

- ・ こころのケアを求めて
- ・ 趣旨説明（教委・社協・ボラセン）
- ・ 有資格者や加盟団体への呼びかけ
- ・ 登録者の状況

### 3. 実際の活動開始後の状況

### 4. まとめ

- ・ 活動のあり方、及びレク・ボラの役割

~~~~~

◎新潟では、来年2009年開催の「トキめき新潟国体」にむけ、種々の運動的問いかけやボランティアを募る呼びかけなどがなされています。マスコットのトッキッキにちなんだトッキッキダンスも、講習会をはじめとする様々なHP上で、踊りへの県民の参加を呼びかけています。



~~~~~

典 拠

<http://www.city.nagaoka.niigata.jp/kurashi/kokutai/dance.html>

[//www.pref.niigata.jp/soumu/kokutai/event/](http://www.pref.niigata.jp/soumu/kokutai/event/)

## ワークショップ②

### テーマ 「地域と学生を繋ぐ教育活動の実践」

#### ～教育の特色を生かしたレクリエーション・サービス～

坂内寿子（新潟中央短期大学）

#### 1. 大学の概要

新潟県加茂市に位置する新潟中央短期大学は、入学定員 80 人、収容定員 160 人の保育系（幼児教育科）男女共学の単科短大である。本学は昭和 62 年にレクリエーション資格の課程認定を受けて以来、幼稚園教諭二種免許及び保育士資格と併せて毎年卒業生の 8 割ほどがレクリエーション・インストラクターの資格を取得し県内の保育所、幼稚園、児童施設において保育者として活躍している。

#### 2. 周囲の状況

本学が所在する加茂市（人口約 32,000 人）は新潟県のほぼ中央に位置し、古くから北越の小京都といわれている。東西に細長く、新潟市、三条市、五泉市、田上町と接している。県立自然公園粟ヶ岳を水源とする加茂川の清流は、三方を山に囲まれた市街地を縦貫して信濃川に注いでいる。

産業は全国シェアの 70%を誇る桐たんすや家具、建具、屏風など木工のまちとして全国的に高い評価を得ている。観光面でも、加茂市の花「雪椿」の群生地として脚光を浴びている。また「日本一の福祉のまち」を目標に福祉水準の維持、充実に努めている。

#### 3. 教育の特色

本学の教育特色の第 1 は、小規模校だからこそできる徹底した少人数制教育があげられる。学生と教職員の距離が近く「ホットな人間関係」を結びながら「きめ細やかな教育の実践」を全学態勢で取り組んでいる。

第 2 は、「地域に開かれた大学」「地域に根ざした教育」として、地域に向けてさまざまな行事・活動を展開し、交流を広げ深めている。なかでも昭和 61 年から継続して取り組んでいる“中央短大ミュージカル”は文部科学省が選定する『特色ある大学教育支援プログラム』に平成 15 年度採択され、地道な教育実践が評価された。その他にボランティア活動として、依頼のあった地域の保育現場や子育て支援サークルに出向いて、子どもたちや保護者に合唱、合奏、手品、ゲーム、ダンス、オペレッタ等を披露する“出前保育”や自然環境に恵まれている本学の周辺を散策する“自然体験・森の散歩”は好評を得ている。

また、“地域団体主催のイベント”にスタッフとして参加することを奨励しており、成果を上げている。なかでも来年度開催される「トキめき新潟国体」のオープニングにおいて披露される“トッキキダンス”の普及活動が新潟市在住の学生を中心に行なわれている。

#### 4. 教育活動の実践を紹介

本学は学生が主体となって事業の企画、運営、評価といったプロセスを体験的に学ぶなかで地域を理解し、人との交流を深め、感動体験を共有できる教育活動の実践を特色としている。そうした様々な地域と学生を繋ぐ教育活動＝レクリエーション・サービスを紹介することで話題提供としたい。